

循環する箱へ - 上尾シラコバト住宅を事例とした団地再生モデルの提案

八代研究室
01112018 岩野 健一

1. はじめに

上尾シラコバト住宅（団地）は 1967 年に国体史上初の選手村として建設された。間取りは 1 第 2 次大戦直後の住宅難の時代の住み方調査をもとに考案された標準設計「五-C 型」から派生した形式で、現在に至るまで埼玉県の特例県営住宅として使用されている。当初は敷地中央を芝川が流れていたが、1994 年に暗渠化され遊歩道となり、閑静で緑豊かな環境は周辺住民にとっても貴重な憩いの場を提供している。しかしながら半世紀を経過した現在、シラコバトの事例に限らず、全国の団地は様々な問題を抱えている。そこで本計画では当該団地が抱える問題を「モノ」と「ヒト」の両面から整理し(図 1)、

「閉塞状況の箱を循環する箱」をテーマに、新たな

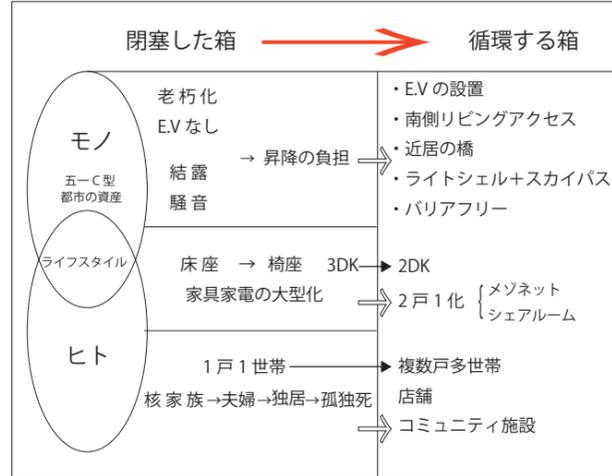


図1 団地の現状分析と提案内容

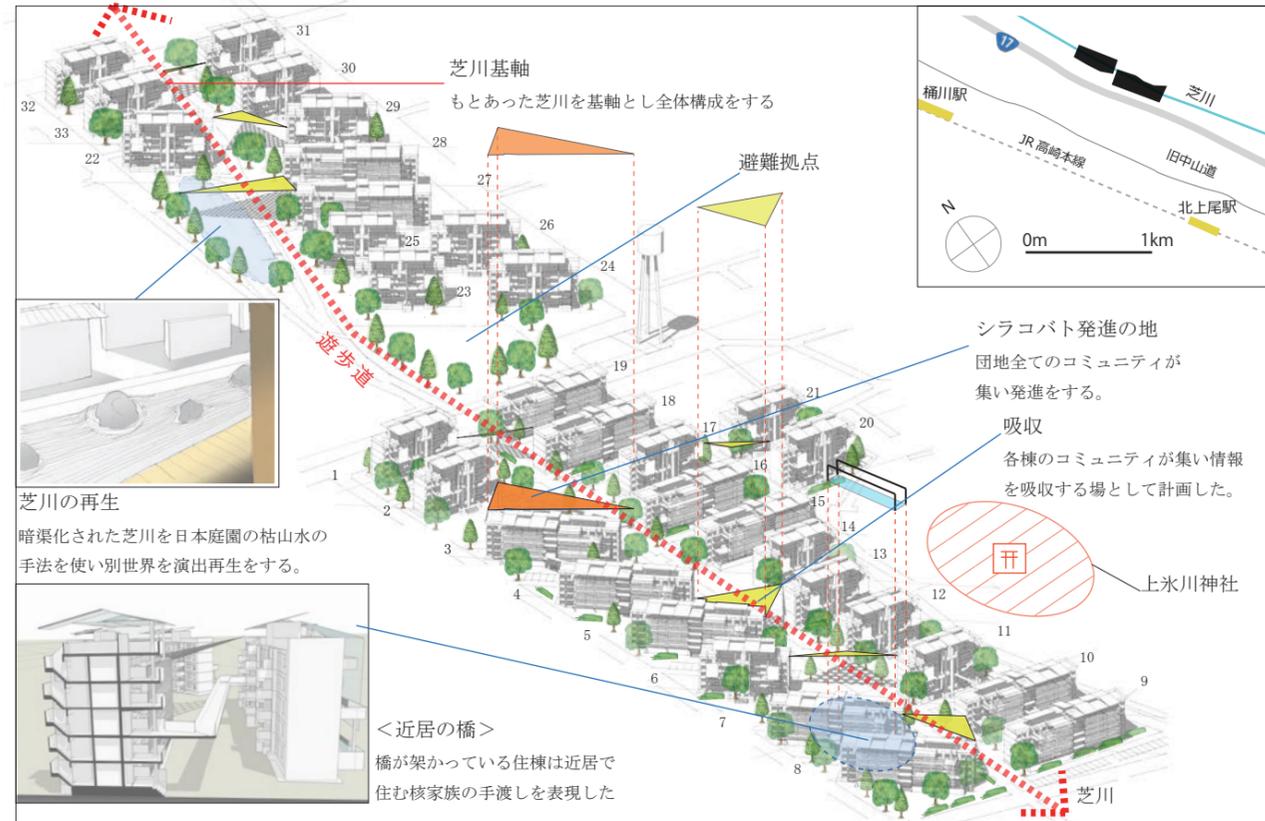


図2 全体構想図

2. 設計内容

2.1 地域に開かれた箱へ (図 2)

遊歩道としての機能特性を活かし地域に開放した空間を創出した。すなわち芝川を基軸とした遊歩道沿いの各棟 1 階に店舗や公共空間を設け、高齢者の社会経験を活かしながら多世代交流を触発する生活の場となる。また、住棟間にかかる三角形の膜は夏の日差しを遮り、冬は陽溜りをつくり、団地を含めた周辺住民のたまり場となる。また遊歩道の北西に芝川を再生した枯山水を設け、一年を通じて川との共生感をもたせる。

2.2 住棟（ブロック）を開く (図 3)

北側階段に加え、新たに南側にエレベータと空中廊スカイパスを増設し、南側からのリビングアクセス型へ転換した。スカイパスの手すりに可動式ライトシェルフを設け夏期の遮熱性能を向上させる。さらに住棟をつなぐ「近居の橋」を渡し、各住棟の内外にサーキュレーションを持たせた。

2.3 住戸を開く (図 3)

従来の核家族を想定した「1 戸 1 世帯」のかたちから「1 土戸多世帯」という新しい住まいのかたちを提案する。図 3 中段左の表に示すように規模は従来の 1 住戸 1 ユニットから 0.7~2 の 4 ユニットとし、2 ユニットタイプではメゾネットユニット (M 型) と 2 戸 1 (S 型) の両タイプを設定した。各戸とも南北からアクセス可能で、このうちメゾネットタイプではもとある北側階段室を 2 住戸が共有する半プライベート共有空間とした。

3. おわりに

本計画は、私自身が団地育ちであることに加え、埼玉県が実施したラコバト住宅改修プロジェクトへの参画を機に高齢化社会に加え、生活スタイルの移り変わりにより生じた諸問題を再認識した事から始めたものである。1950 年代の高度成長期に生まれた「団地」から 21 世紀の新たな財産として社会に求められる集合住宅に生まれ変わることを切に願う。

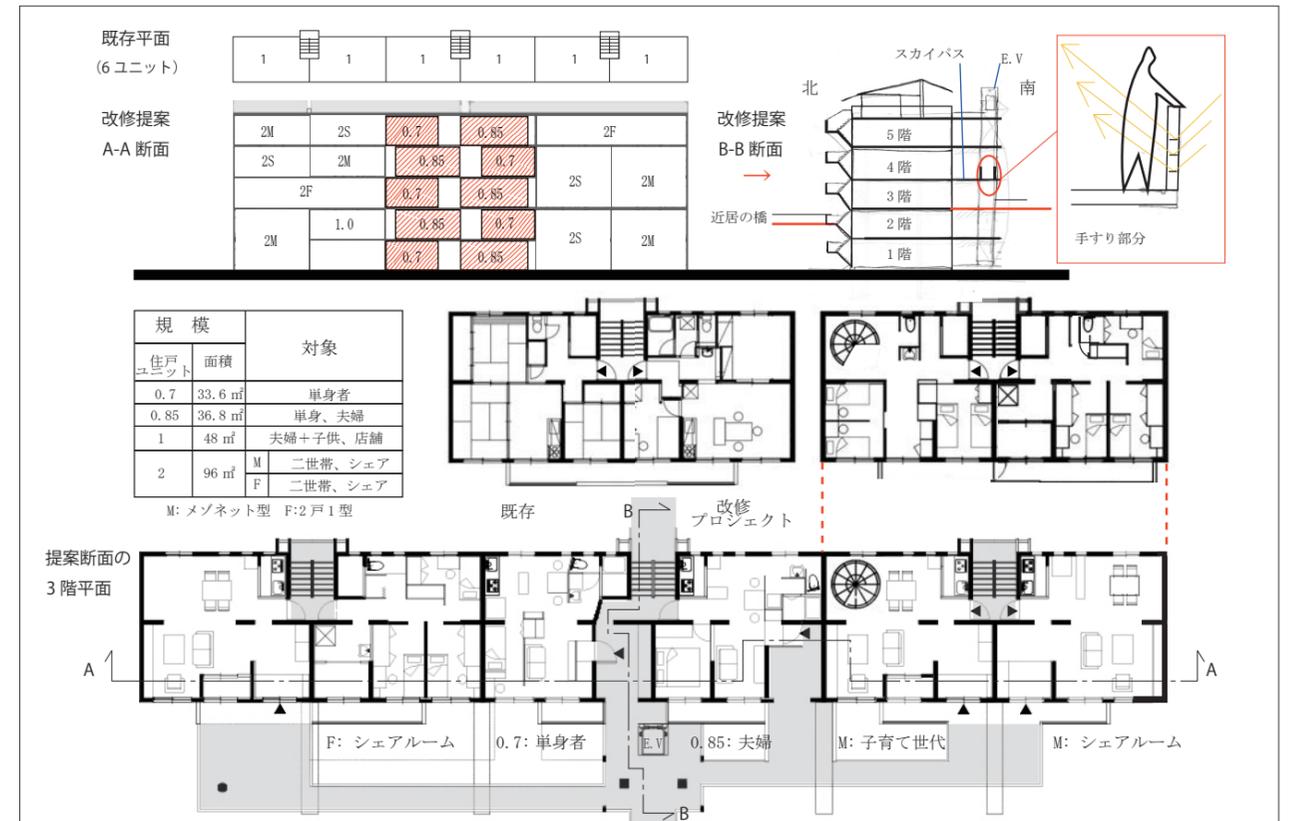


図3 提案プランの平面お3および住棟の配置